

「居場所」からみる私という存在と社会について

山崎 哲

1、このテーマを選択した動機

私は「居場所」というテーマに興味があり、考えを深めてみたい。

私は中国残留邦人 3 世である。幼いころから日本と中国を、距離的にも心理的にも、行き来する生活の中で、常に心の中がよくわからないもやもやしたつかかりを気にしながら生きてきた。「日本国籍を持ちながら、育ったのは中華的な文化の中」、「教育は日本で受けながらも、思考の根底にはやはり中華的な要素」、「日本人としての権利は享受しつつも、そもそも自分は日本人であることにどれだけの現実味が存在するのだろうか」、などなど、突き詰めれば、「自分は何人なのか」、「自分は何者なのか」、という問いが常に私の姿にびったりと影のようについてまわっていた。と同時に、私はどこにも属していないのではないか、この先も何にも属することはできないのではないか、などの不安から、何かに属することへの憧れが自分の中で大きくなってきていることに気づいた。

属する、ということに関して、サークルを例に挙げてみたい。大学に入って、自分の居場所を求める私にとって、サークル活動というものはこれ以上ない最高のものに映った。さっそく、ある運動系のサークルに入ったのだが、それから半年もたたずに辞めてしまった。ちょうどそのころ、転部試験・留学試験を受けるための対策をはじめだし、対策、授業、バイト、サークルをこなしていくのは難しいだろうとの判断からであった。その後の転部先、留学先でできた友達とは本当にいい交友関係が築け、また、多くを学ぶことができ、それぞれが自分の居場所の大切な一部になったことは間違いない。しかし、それに「属して」いるのか、というとまた違うのかな、とも思ったのである。サークル活動というものがどのようなものか知らないからであろうか、サークル活動というものに異様なまでの憧れの念を抱いてしまう。それは、同じ趣味を持った人たちの、強い絆、と言うか、その結束の強さ、だとか、その排他性だとかに、ある種の陶酔感にも似たようなものを感じてしまうのである。「私は〇〇に属している」、と、自分も他人もみてわかる、その所属感に私は強くあこがれてしまうのだ。もちろん、サークル活動ではなく、他の場所に自分の居場所を見出している人も多いいと思う。ひとりひとり違ったさまざまな居場所をもっていて、どこに一番の価値を置くのかそれぞれ違っていることがとてもおもしろいなと最近感じている。みなは何に自己存在の基盤を置いているのだろうかという考えが大きくなってきた。

そこで、このレポートでは「居場所」について対話をする中で私はなぜ居場所に対してこれまで渴望しているのかをさぐり、また、私とみなとの居場所観を比較することにより、私の居場所に対する考えを深化させこれからの人生における自らの居場所についての指針を見つけていきたいと思う。

2、対話

今回、私は対話を二人の方にお願ひしました。お二方を選ばせていただいたのは、人生経験において共通点がありながらも、私と意見の似すぎていないという基準からである。

(対話をはじめる前の目標は、多くの価値観に触れるという漠然としたものであった。)

2-1 「居場所」とはなにか Aさん編 (物理的なものか、精神的なものか)

私は、日ごろ居場所とは？という問題に対して、どこかに属してその中で必要とし必要とされることだと考えていた。まず、この意見をAさんに話した上でAさんの居場所観について聞いてみた。

*Aさん…同じ学科に所属する女性の友人。私と同時期に中国に留学している。

私：居場所っていうとどこかって聞かれたら、どうこたえる？

Aさん：精神的に自分が存在しているところかな。例えば、その人が自分を想ってくれているとするでしょ、その人の心の中に私が存在している状態。それが私にとっての居場所だと思う。

私：物理的な存在ではなく？

Aさん：うん。例えば早稲田大学って場所があるでしょ？私は早稲田に属しているわけだけど、それそのものには価値は見出さないかな。早稲田で出会った人が大事。出会った人たちが大切で、早稲田っていう場所はその舞台というか…。つまり、早稲田があつて人があるんじゃないなくて、早稲田っていう場所に出会った人たちがいるから早稲田が大事になったわけ。人と出会って、その人たちの心に私が存在することに価値があるんだと思う。

私：その人たちの心の中に存在していることっていうのは、常に想われていること？

Aさん：常に、っていうわけじゃないけど…。

私：忘れられていないこと？

Aさん：あ、うん、忘れられていないこと、そうだね。

→Aさんは、「人が居場所」という。人の中に私の存在が生き続けることが私の居場所、だという。つまり、Aさんの考える居場所というのは、Aさんの外部に存在していて、またそれは他者の心の中という物理的な形を必要としないものなのだ。私にはこれがとても脆いようにみえ、このAさんの発言に対してどうしても疑問をぬぐえずにいた。自らの存在の確認軸が他人であり、そのものに対して自分の意思が完全に働くことがない以上（他者を完全に所有できないという意味で）、それは自分という存在の確認作業を行いにくく、それに伴って生じる不安などはAさんはどうしているのだろうかと思ったのである。私の居場所が私の中（たとえば、わたしはここに属しているのだ！という感覚）に存在していないというのは、私の意見とは言ってみれば正反対なものである。

【私＝「私の中の外部」（自分が〇〇に属しているという認知）に存在、Aさん＝「他者の内部」に存在】

ある場所に属していることで得られる自分自身の存在確認としての物理的な居場所（ある場所をめぐる帰属感、たとえば学校や地域国籍など）についてAさんはどう考えているのだろうか。聞いてみた。

私：物理的なものへの居場所感はまったくない？たとえば、うーん、地球なんてどう？アジアだったり、日本だったりっていうのは。

Aさん：地球？（少しの間）…ないかなあ。やっぱりそれは世界って容貌の差が大きいからかなあ。アジアも政治制度の差があるしなあ。日本は、うん、そうだね、選挙に参加してるし、日本語を使っているからね。

私：それは、じゃあ、ただそこに存在しているから居場所なんじゃなくて、関与…、積極的な関与がカギになるということ？

Aさん：そうだね。日本語を使って私は自己表現をしているわけだし、選挙で自分の意見を国に伝えているし。あと、早稲田も北京（留学先）も自分で選んだし、そういう思い入れみたいのはあるよ。

私：ただそうなって、自分の意志ではなくて属しているところにはあまり思いはないということだね？

Aさん：うん、そうだね。

→Aさんの、場所をめぐる帰属感が明らかになった。彼女は場への積極的な行動が帰属には必要だという。確かにこれはとても重要な要素である。自分からのベクトルが向かわない先に居場所を確保することは難しいだろう。私たちは地球に住み、アジア、日本、早稲田に居る。そのうちの中から自分がどこそこに存在しているという感覚をもつのは人により異なるようだ。（たとえば、私は日本に属しているとは思いますが、積極的に属している感じはしない。私は、積極的に世界に属しているという感覚のほうが強い。）事実として属していることと、それについてどう思うのかは別の問題だということだということを確認した。

（とするなら、積極的でない帰属というのはどのような意味を持つのであろうか。たとえば、私が日本に属しているという客観的事実は私にとって重要事項ではないが、他者から私に向かう視線という位置から考えてみれば、私が日本人であることは重要な判断基準であるはずだ。）

2-2 居場所とはなにか Bさん編

*Bさん…今授業をともに受講している学生。女性。

（Bさんは長い間海外で生活した経験があり、日本帰国後、自らの中にあるそれまでに身につけた文化と「日本的なもの」の間の方に苦しんだ経験がある、という会話の流れに続いて）

私：Bさんの居場所を語る時、英語というものは関係しますか？

Bさん：しませんね。英語を身につけたことで、自分の性格とか行動様式にそれが影響していて、日本に帰ってきたあとに自分の意見を素直に言うことで生意気に思われたりとかを避けたり、みんなで熱く議論をしたりするのは変なのかなとか、女の子はあまり意見をいわずににこにこしているほうがいいのかとか、いろいろ苦労してるので、思わないです。

→この B さんの発言は私にとって衝撃であった。私もほぼ母語として中国語が自分の体の中にしみ込んでいる。自分の中にある異文化によってストレスを感じているという B さんの言葉は、異文化を取り込めば世界が広がるといった私の簡単な脳内構造に大きな影響を与えた。私も、自らの中にある中国と日本に対して生活していく上でいろいろと考えることやストレスがあった。それでも、私は中国（語）に居場所の心地よさを感じていたし、それが異文化とともに生きる者としての”ご褒美”のようなものと考えていた。

(この後、私がいわゆる「純ジャパ」ではないことで居場所を考えることになったという話に続いて、私はどこにいても自分が他者に感じてしまうという会話に続き、B さんから自ら人々に出会うことの大切だというテーマをいただいた。)

B さん: 私は高校までは地方で、私みたいにユニークな人があまりいなかったんです。でも、大学で東京にきて、色々な外国人と遊ぶようになってから、周りがユニークな人だらけになって自分に似た背景がある人や 私がもつ日本の文化、アメリカの文化、それら両方を理解しようとしている人そういう人たちとつながっていくうちに、心地よいと感じる場所は少しずつできてきたように思います。特に、日本好きのアメリカ人とか、同じような帰国子女とか、ですね。山崎さんは、自分に似たユニークな背景がある人との交流ってありますか？

私: ないですね。

→B さんとはパソコンのチャットで対話させていただいたのだが、ないですね、と打ち込む自分の指が電気を帯びているようであった。私は自らのちいさな世界に閉じこもって外との接触をしていなかったのである。それにはっきり気づかされた。

(お二方とも長く対話させていただいたが、その中からいくつかの観点を抜粋させていただいた)

3、結論

3-1 インターアクションから考えたこと

私の居場所観はあくまでも私の中にあっただ。それが、BBS 上でのやりとりとお二方との対話を通じて、それは結局自分の中に固執したものであるということがはっきり理解出来た。必要とし必要とされることが大切だと言っはいたが、まず私が外部とのかかわりを積極

的に行っていない、それではもちろんまず必要とされることはない。私は、私のなかだけに居心地のよい居場所を見つけていたのだ。

3-2 「居場所」の結論を自分の問題として考えた結果

以上までの考えをまとめ、考えた末、以下のような結論に達した。

「居場所」についての考えは、個々人により設定の仕方がさまざまに異なり、視点も違い、また、個々人の「居場所」だとする認識の次元（何かの対象に対してどうすることによって「居場所」とするか）も異なる。つまるところ、「居場所」（をどう認識するのか）は、その人自身の考え・価値観を反映するものであり、また、その人がこれまでの人生、これからの人生にどのように責任を負うのか（負おうとしているのか）の表れでもある。

「居場所」についてばかり思考を巡らせる私は、私の“特殊性”を通して社会を見ることばかりに一生懸命であったが、それは、その“特殊性”の認識による私自身による私の社会からの隔離であった。「居場所」への新たな視点を手に入れた私はこれからの人生に対して、社会のコミュニティに自ら積極的にかかわっていき、そこで自分を主張していき、私の居場所を見つけていくことで、また、自分の主張に責任を持つことで他者に自分の存在を認知してもらい、そこに生まれる相互作用を自らのうちにつなぎ留め続けることで、私という存在を確立していき、社会に対して積極的な主体として自らをアピールし続けることが必要なのであろう。

これから、少し怖いけれども、自分を社会に積極的に出していこうと思う。それは、必ずや私の居場所への渴望に対する大切な答えとなるだろう。この授業（一連のみなどのやりとり）を通じて、私はその一步を踏みこんだのだと思う。そして、自分の中の世界は、だれかとの接触があって初めて一つの世界としての価値が存在するのだろうと思った。私は、私として自然的に存在してきたのではなく、外部のさまざまな影響を受けてはじめて私という価値を持つのだろう。そもそも、中国残留邦人の血をひく私の生自体が外部接触のかたまりのようなものであるのかもしれない。その意味、私が私であるという意味を常に頭に置きながら、世界とつながっていきたい。